様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２４７３０５５３

研究課題名（和文）いじめの傍観行動と援助行動に関する研究

研究課題名（英文）Moral disengagement among high school bullying.

研究代表者
大西　彩子（Ayako, Onishi）

甲南大学・文学部・講師

研究者番号：４０５７２２８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では認知の歪みの修正という観点からのいじめ防止対策について検討するため，一般的な反社会的行動に関する選択的道徳不活性化(SMD)といじめに関する選択的道徳不活性化(SMDB)に着目し、それらがいじめの傍観経験、制止経験、加害経験、被害経験とどのように関連するのかを明らかにすることを目的とした。調査は，公立定時制高校の1～4年生12クラス260名を対象とした。
　その結果、いじめの加害および傍観行動と被害経験には、一般的な反社会的行動に関する認知の歪みであるSMDといじめの認知の歪みであるSMDBが関連していることが示された。

研究成果の概要（英文）：This study examined the relation between selective moral disengagement and different positions in bullying at high school. The participants were 260 Japanese night high school students. Adolescents were asked to complete a series of questionnaires regarding “Self-reported behaviors during bullying episodes” (Pozzoli & Gini, 2010), “Selective Moral Disengagement” (Bandura et al., 1996) and “Selective Moral Disengagement in bullying”. The Results indicated that bystanders (passive bullies), victims and bullies were positively related to Selective Moral Disengagement in bullying.

研究分野：教育心理学

キーワード：いじめ　高校生　認知の歪み　選択的道徳不活性化

１．研究開始当初の背景

これまで多くの研究者が成人や子どもの社会的・心理的な適応に悪影響があるとして、攻撃行動やいじめなどの反社会的行動に焦点を当てた研究に力を注いできた(Smith, Cowie, Olafsson, & Liefootghe, 2002 ; Parker, Rubin, Erath, Wojslawowicz, & Buskirk, 2006)。伝統的には、殴る・蹴るなどの身体的攻撃や非行などの反社会的行動に特化した研究が多く見られるが(Anderson & Bushman, 2001)、近年より潜在的な攻撃行動（間接的・社会的・関係性攻撃）についての研究が注目を浴びている(Archer & Coyne, 2005 ; Crick et al., 1999; Galen & Underwood, 1997)。

平成 25 年 9 月に日本で施行されたいじめ防止対策推進法では，いじめは「教育を受ける権利を著しく侵害し，その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず，その生命又は身体に重大な危険を生じさせるおそれがある」ことを認めた上で，学校現場にいじめ防止のための基本方針の策定といじめを防止するための委員会を設置することを義務付けている。しかし，いじめの予防法に関する国内の知見は，未だ十分に蓄積されていないのが現状である。

一方、欧米では Bandura (1996, 2002)が提唱した Selective Moral Disengagement (選択的道徳不活性化：以下 SMD)が，罪悪感などの向社会的な感情を抑制し，反社会的行動を引き起こす認知の歪みのメカニズムとして注目されている。SMD は、行動側面として「道徳的正当化，都合の良い比較，婉曲なラベル」が，発動側面として「責任の転嫁と拡散」が，結果側面として「結果の無視や矮小化」が，受容側面として「非難の帰属，非人間化」という下位分類があり，それぞれが役割を果たしながらも，全体として道徳不活性化を引き起こす働きをする(Bandura, 2002)。この SMD は，青少年の反社会的行動や攻撃行動との関連が様々な研究で認められている(Gini, Pozzoli, & Hymel, 2014)。例えば，Barchia & Bussey (2011)は，青年期の生徒 1,167 人(平均年齢 13.45)を対象に縦断調査を行い，初期(8 か月前)の攻撃性や攻撃効力感(Aggression self-efficacy)を統制してもなお，SMD が 8 か月後の他生徒への攻撃頻度と関連があることを示している。

通常、誰かをいじめると、周りの友達から被害者が可哀そうだと非難され恥ずかしさを感じたり、自分自身の良心が痛んだりするため、加害者は被害者をいじめ続けることが難しくなる。しかし、いじめ被害者を自殺に追い込むような深刻ないじめでは、被害者に対する心理的、物理的な攻撃行動が長期的に行われていることが多い。こういった長期的で深刻ないじめにおいて SMD は、いじめ加害者の罪悪感や恥などの感情を抑制し、いじめを中断するのを妨げる役割を果たしていると考えられる。しかし、国内で SMD といじめとの関連を検討した研究は見当たらない。また、SMD をいじめとの関連で研究する際、SMD が全般的な反社会的行動についての認知の歪みを扱っているため、測定項目にいじめについて尋ねるものが少ないことも問題となる。

２．研究の目的

本研究では認知の歪みの修正という観点からのいじめ防止対策について検討するため，一般的な反社会的行動に関する選択的道徳不活性化(SMD)といじめの選択的道徳不活性化(SMDB)に着目し、それらがいじめの傍観経験、制止経験、加害経験、被害経験とどのように関連するのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

公立定時制高校の 1～4 年生 12 クラス 260 名を対象とした。調査は 2014 年 11 月に行った。調査は担任によって学級ごとに実施され、調査結果は研究目的にのみ使用すること、答えたくない質問には答えなくてよいことが伝えられた。

本研究で使用した尺度は以下のものである。

(1) いじめ経験：Self-reported behaviors during bullying episodes (Pozzoli & Gini, 2010)を参考に作成し，4 月から 10 月までに学校でどの程度いじめに関する経験をしたかを「とてもある～まったくない」までの 5 件法で尋ねた（16 項目）。

(2) 選択的道徳不活性化(SMD)：Bandura, Barbaranelli, Caprara, & Pastorelli(1996)およびその和訳(吉澤，2015)を参考に作成し，「とてもそう思う～まったくそう思わない」までの 5 件法で尋ねた（22 項目）。

(3) いじめの選択的道徳不活性化（SMDB）：Attitudes toward bullying (Salmivalli & Voeten, 2004)と SMD を参考に作成し，「とてもそう思う～まったくそう思わない」までの 5 件法で尋ねた（14 項目）。

４．研究成果

上記３尺度について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った(.35 以下の負荷量を示した項目および二つ以上の因子に同程度の負荷量を示した項目は除外した)。固有値の減衰状況と解釈可能性に基づき，以下の結果を抽出した。

(a)いじめの役割(BSR)

いじめ制止行動、α=.86（４項目）
例：脅されたり、攻撃されたりしているクラスメートをかばってあげた。強くたたかれたり、押されたりしているクラスメートをかばってあげた。

傍観行動（間接的いじめ）、α=.70（４項目）
例：他の人の悪口や悪い噂を言っている生徒がいるときは、知らないふりをした。クラスメートがいじめられているが、自分には何もできないと思い、何もしなかったことがある。

いじめ被害経験、α=.69（３項目）
例：クラスメートの何人かは、私に嫌なあだ名をつけたり、嫌なことを言ったりして私を不愉快にさせる。私は仲間から無視されたり、仲間はずれにされたりした。

直接的いじめ加害行動、α=.71（２項目）
例：クラスメートに変なあだ名をつけたり、脅したり、攻撃したりした。クラスメートをたたいたり、おしたりした。

(b) 選択的道徳不活性化(SMD)
１因子、α=.85（21 項目）
例：先に規則を破っている子がいれば、その後に規則を破ろうとする子は悪くない。気に入らないクラスメートをたたいても、それはただ「教育してやっている」にすぎない。もっと悪質な違法行為に比べたら、万引きはそれほど深刻な問題ではない。

(c) いじめの選択的道徳不活性化（SMDB）：
１因子、α=.85（14 項目）
例：いじめられている人を笑うことは、そんなに悪いことではない。気に入らない人を殴ったり、けったりすることと比べれば、悪口を言ったり、仲間はずれにしたりするぐらいは問題ない。いじめられても仕方のない人がいる。

各因子の平均値および標準偏差は Table1 の通りある。

Table 1 各因子の平均値と標準偏差

	M	*SD*
いじめ制止行動	7.10	3.49
傍観行動(間接的いじめ)	7.95	3.27
いじめ被害経験	4.40	2.19
直接的いじめ加害行動	3.47	1.89
選択的道徳不活性化(SMD)	42.34	10.35
いじめの選択的道徳不活性化(SMDB)	27.08	8.20

まず、選択的道徳不活性化(SMD)といじめの選択的道徳不活性化（SMDB）における男女差と学年差について二要因の分散分析を行った。その結果、SMD と SMDB には男女差および学年差、交互作用は認められなかった。

次に，いじめの役割(BSR)ごとの認知の歪みについて明らかにするため、４つの役割（いじめ制止行動、いじめ傍観行動、いじめ被害経験、直接的いじめ加害行動）と選択的道徳不活性化(SMD)およびいじめの選択的道徳不活性化(SMDB)について相関分析を行った(Table 2)。その結果、いじめの制止行動と SMD、SMDB は男女ともに有意な関連が認められず、いじめを止めようとすることと認知の歪みには関連がみられなかった。

傍観行動（間接的いじめ）と SMD は、男子においては有意な関連が認められなかったが、女子では中程度の正の相関が認められ、いじめに消極的に参加した女子生徒ほど反社会的行動に関する選択的道徳不活性化が高かった。傍観行動（間接的いじめ）と SMDB は、男女共に低から中程度の正の相関が認められ、いじめに消極的に参加した生徒ほどいじめの選択的道徳不活性化が高かった。

いじめ被害経験と SMD との関連は男子においては有意な関連が認められず、女子において低い正の相関が認められ、いじめ被害を受けた女子生徒ほど反社会的行動に関する選択的道徳不活性化が高かった。いじめ被害経験と SMDB は男女共に低い正の相関が認められ、いじめ被害を受けた生徒ほどいじめの選択的道徳不活性化が高かった。

直接的いじめ加害行動は、SMD と SMDB において男女共に低から中程度の正の相関が認められ、直接的いじめの加害行動をした生徒ほど、反社会的行動およびいじめの選択的道徳不活性化が高かった。

これらの結果により、直接的いじめ加害および傍観行動（間接的いじめ）と被害経験には、一般的な反社会的行動に関する認知の歪みである選択的道徳不活性化と今回新たに検討したいじめの選択的道徳不活性化が関連していることが示された。

Table 2 相関分析の結果

男子/女子	傍観行動(間接的いじめ)		いじめ被害経験		直接的いじめ加害行動		SMD		SMDB	
N (140 / 113)	139	116	140	115	137	116	133	115	137	116
いじめ制止行動	.35***	/ .36***	.50***	/ .50***	.34***	/ .38***	.03$^{n.s.}$	/ .17$^{n.s.}$	.02$^{n.s.}$	/ -.02$^{n.s.}$
傍観行動 (間接的いじめ)			.34***	/ .46***	.25***	/ .47***	.16$^{n.s.}$	/ .37***	.29***	/ .51***.
いじめ被害経験					.27***	/ .42***	.12$^{n.s.}$	/ .25**	.20*	/ .24**
直接的いじめ加害行動							.18*	/ .27**	.23**	/ .30**
選択的道徳不活性化(SMD)									.57***	/ .56***

$^{***}p<.001$, $^{**}p<.01$ $^{*}p<.05$

現在、得られた知見を投稿論文として執筆中である。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 1 件）

①<u>大西彩子</u>　いじめの加害、傍観、制止行動および被害経験と認知の歪みの研究、日本社会心理学会、2015 年 10 月 31 日、東京女子大学

〔図書〕（計 2 件）

①<u>大西彩子</u> いじめ加害者の心理学－学級でいじめが起こるメカニズムの研究－、ナカニシヤ出版、2015、110

②吉澤寛之・大西彩子・ジニ，G・吉田俊和(編) ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動－その予防と改善の可能性－、北大路書房、2015、270

〔その他〕
パンフレット
大西彩子　いじめを予防する学級づくり
2014、10

６．研究組織
(1)研究代表者
大西　彩子（ONISHI AYAKO）
甲南大学・文学部・准教授
研究者番号：40572285

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし